

伝統技術と精神を受け継ぐ炎 日刀保たたらで操業始まる

日本で唯一、その伝統技術の保存伝承と、日本刀の原材料となる玉鋼を製造する「日刀保たたら」で、三昼夜にわたる今年の操業が、一月十八日から二十四日までの間、三回に分けて行われました。

操業の始まり

火入れ式

十八日の火入れ式には、日本美術刀剣保存協会(東京都)、日立金属安来工場、靖国神社などの関係者約三十人が出席。神職が祝詞を奏上し、操業を

▼最初の砂鉄(初種)を装入する木原村下



行高殿内を祓い浄めた後、関係者が玉串奉奠を行い、昭和五十二年の復活から三十五年目の節目となる操業の安全を祈願しました。

その後、国選定保存技術保持者で村下の木原明さんと村下代行の三上孝徳さんが、高殿の中心に築かれた粘土製の炉(高さ約一・三メートル、幅約〇・九メートル、長さ約三メートル)に、最初の砂鉄(初種)を4キロずつ装入。鞆により炉へ風を送られる度に、操業の始まりを伝えるようにオレンジ色の炎が高く立ち上がっていました。



▲神事の様子

激しい火の粉とともに 真つ赤に燃える鉄塊「鋸」出現

二代目鋸出し

一月二十八日早朝、二代目(二回目)操業のクライマックスとなる「鋸出し」が行われました。三昼夜、不眠不休で続けられた操業では、砂鉄約十ト、木炭約十二トが炉に装入されました。

六時頃から、木原村下と三上村下代行、十一人の村下養成員により、炉を取り壊す「窯崩し」が始まりました。

掛け声で息を合わせ、渾身の力で炉が取り壊されていくと、火の粉を放ちながら、炉の底から真つ赤な鉄塊「鋸」



▲炉が壊され姿を現した「鋸」



▲伝統継承への意欲を話す木原村下

今回造りだされた鋸は、幅約一・二メートル、長さ約三メートル、重さ約三ト。今後行われる鋼造りの工程で選別された約二・五トの玉鋼は、日本刀を始め、茶の湯釜などの高級铸件工芸品などの材料として全国各地に届けられます。

景観 まち の 奥出雲への「想い」をことん話す大会議 景観シンポジウム開催

奥出雲の自然、歴史、文化、伝統について改めて考え、景観に対する意識啓発を図ろうと、「奥出雲への『想い』をことん話す大会議」と題した第一回景観シンポジウムが一月二十八日、カルチャープラザ仁多で開催され、町内外から約二百人が参加しました。

第一部 基調講演

第一部では、奥出雲町景観策定委員長で山陰中央新報社特別論説委員の前田幸二さんによる講演が行われました。



▲前田幸二さん

前田さんは「景観は、景色を人が見ることで成り立つ。私的価値観を尊重しながらも周囲との調和を図るために景観計画は必要なもの」と計

第二部 いろいろな地域活動を発表

第二部では、住民提案型きり輝く地域づくり事業で活動を展開する、とんぼの会(三沢)、追谷地区かな池整備団体(竹崎)、加食サンシヨウ魚保存会(横田)、金言寺大イチヨウを守る会(大馬木)の四団体と、昨年九月から十月にかけて行われた「わがところ再発見ワークショップ」に取り組んだ郡自治会が活動を報告しました。

第三部 ワークショップで奥出雲への想いを交換

第三部では、「未来へつなげる奥出雲へのメッセージ」をテーマにワークショップが行われました。参加者は十五グループに分かれ、町の地図上に好きな景観ポイントをピックアップ。それを踏まえて、奥出雲へのメッセージを書き出しながら



▲郡自治会の発表に聴き入る参加者

互いに意見を交わしました。各グループからの発表では「自分が住む町に誇りを持つことが大切」「森林・田園・鉄は奥出雲の景観の原点」「今ある景観資源を生かす方法が必要」といった様々な意見が出されました。



▲活発に意見を交わす参加者

奥出雲の魅力写真を写真で発見

「景観フォト百選」写真展

景観シンポジウムの会場ロビーでは、「景観フォト百選」で選ばれた写真が展示されました。

会場には、田園風景や雪化粧の街並み、躍動感あふれる祭りの様子を写した写真など、四季折々の様々な写真が所狭しと並べられていました。

来場者は、風景や人々の営みが美しく切りとられた写真を、一枚一枚、丁寧に観賞していました。



▲写真を観賞する来場者